

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

淫舞の
巫女姉妹式
孕みし者のさだめ

小説 空蝉

挿絵 ヤツシマテツヤ

第一章 鬼巫女・真希

第二章 高野侵攻

第三章 贖罪

第四章 妊婦汚辱

第五章 異形の産声

終章 血塗られた希望

007

024

073

136

176

246

登場人物紹介

Characters



しんぐうまき 新宮真希

かつて最強を謳われた退魔巫女姉妹の姉。鬼に破れ、現在はその軍門に下っている。沙津樹の身を一心に気遣い、守ろうとしている。

しんぐうさつき 新宮沙津樹

真希の妹で、同じく日本屈指の戦巫女だったが、激しい陵辱の末に鬼の子を孕み、現在はその力を失いつつある。

おに 鬼

人の現れる遙か昔より日本の地に住む妖怪たちの首領。強大な力を持ち、人間を駆逐する計画を立てている。

ぬらりひよん

陰湿陰険な参謀妖怪。身体から生やした鳶触手を使い、姉妹を襲る。

ばとうようかい 馬頭妖怪

本能による強い性欲と腕力を持つ、馬の姿をした妖怪。

ぺちんっ、ぺちぺちっ。硬く反った肉棒が巫女の柔らかな頬を二度、三度と往復してぶつ。人という種を超越して以来無意識に下に見ていた存在、人間の、それも老齡の男にように弄ばれているという屈辱。憤りを覚えるよりも先に、半鬼としての膂力も、巫女として培った能力も奪われた現状に無力感と、ただただ情けなさが込み上げる。

「くうっ、うっ！ んぁ、あぁ……くさぁ、いいっ……」

頬と亀頭とで糸引く粘液から発散される生臭い臭気が、媚肉と成り果てた全身を堪らなく疼かせた。知らず知らずのうちに、少しずつ唇が大きく上下へと開いていく。すう、すうと大量に肺に収めた臭気に、縄の感触がまだ残る股根がキュンと締まって蜜をこぼす。無理矢理振り向けられた鼻先で、牡のにおいが充満する。そして――。

「それ、わしの怒張は、もうとうに準備ができているから……のッ！」

——ぐぼおおオッ！ ごづんッッ！

「……むぐうううッ!? んぐうっ、げうう……ッ！」

唇を閉じる間もなく一気に喉奥までを、硬い肉の槍に貫かれた。丸みを帯びた亀頭で叩かれ、弾んだ喉肉がビクビクと喜悦に震える。込み上げるえぎとは正反対に、心は肉穴の一つに臨戦態勢の牡肉がみっちりと収まっている安堵感に包まれていく。

（く、苦しいっ……ちん、ぼおッ、大きすぎィ……い、息があぁ！）

並の妖怪にも匹敵する太さの剛棒を啜えさせられ、限界まで押し拡がった顎関節が悲鳴

を上げる。肉棒と口粘膜のわずかな隙間から取り入れる空気は、牡肉の熱気で温まり、じつとりとにじむ汗と先走りの臭みを備えて巫女の肺まで犯し抜いてゆく。畳んだ膝裏にはじつとりとぬかるむ汗がにじみ出していた。

今の自分はまさしく腕も脚も必要のない性奉仕道具なのだ、と自虐の念が胸をかすめ、随伴した痛痒さがよけいに乳首をしこらせる。

（こんなところで、こうしてる間にも沙津樹はっ……くうっ、あ、あたしはあっ……）

硬く尖った乳首は、あれだけ放出した直後にもかかわらず、じわ、じわと母乳を溜め込んでいた。口中の肉勃起が雄々しく跳ねて存在感を示すたび、抑えきれない肉欲がみつともなく張った乳の奥から、もじつく股の間から、それぞれの蜜と一緒に迫り上がって真希の頑迷な精神を苛んでいく。

「これも御山を預かるわしの務め。穢れた巫女の口への清めの儀式。滞りなく、早々に済ませるとしよう」

老人の言葉の端々に混じる蔑みと、少しの昂奮も感じられぬ事務的な口調とに、かえって言い知れぬ恥辱感を覚えた。男は欲望の果ての行為ではなく、あくまで「義務」だと言いきったのだ。

（あたしは、ただの穢れた存在。欲情する価値もない、そういうことか……く、うううっ）
老人の肉棒は降々と反り返って口内を埋め、昂ぶり任せの抽送を始めるでもなく、どっ

しりと舌の上で居座り続けている。

「んぶうつ、ぐ、くうう……ち、くしよお、んぶああ……」

女として、人として軽んじられていながら、肉欲に溺れるのを止められない自分がどこまでも情けなかった。舌を押しつけ突き入った剛直の臭みが肺に入り込み、熱を感じた口内粘膜がじわりと悦びのよだれを垂らす。どうにか抵抗を試みようと気張ってみても、腕も脚も、限界まで開かれた顎関節も、求めに応じてはくれなかった。

「そおれ、わしの先走りを、口の中全体にすり込んで進ぜよう」

一分、二分、いやもつと長く巫女の身に圧しかかった静寂の拷問の果てに、互いの粘膜を馴染ませるように微動だにせずにはいた老人の腰が、ようやく緩やかにくねりだす。

ぐちゆうつ……ぐちッ、ぐちゆぢゆるうッ……。息苦しさに加えてむせ返るほどの牡臭さに震える唇が、牡肉の蠢動しゅんどうによって卑猥に歪まされる。

「ぐむうつ！ んんー！ んぐつ、ぐぶうおお……ッ！」

抵抗力を失った女をあざ笑うかのように、口中一杯に膨らんだカリ首が老人の腰の回転に合わせて、ゆっくりと真希の舌尖や舌裏に溜まった唾液を掻き回す。

（粘汁があたしの唾液と混ざって……んぷ！ ネバネバが舌に、菌茎に絡んでくるう！）

攪拌され粘り気の増した唾液と、元々粘性の強い濃厚な先走り汁とが絡まり、ドロリと口内粘膜に張りついていく。大量に生成された淫蕩の粘性汚濁は牝を発情させる淫臭を放

ち、たちまちのうちに粘膜から吸収されて、真希の熟れた肉体を蕩かせていった。

——ぢゅぢゅッッ！

「んごおッ！ ごぶっ、えふふうっ……！」

緩やかに沈み入ってきた亀頭に喉奥を叩かれ、えずきが込み上げる。深々と押し入った喉元でなおも膨張する肉棒の熱と存在感とに、望まぬまま喉がヒクヒクと喜悅の痙攣を返してしまふ。舌越しに伝わる振動から、耳を、意識を離せない。

「遠慮なく、わしの先走りを吸るがよい。さすればそなたの穢れは清まり、邪気は滅する。ただの女となりて、この地に落とした幾多の同胞の血をその命であがなうのだ……！」

初めて、老人のシワに隠れていた瞳に、隠し通せぬ怒りの色がにじんだ。よくよく目を凝らせば、僧衣は汗でべつとりと老体に張りつき、呼吸もわずかだが乱れている。

（余裕がある、ように見せていたのか……？ つくう、で、でもっ）

ぐじゅっ、じゅぶぶっ、ぶじゅうう！ 無様に肉で押し上げられた口端から、泡立った粘液が吹きこぼれる。無意識に吸り上げ、口中に戻して咀嚼する。じわりと舌尖に粘り気が広がるのと同時に、甘い感情が胸を貫いていった。

だらりと垂れた指の谷間を、蒸れた汗が滴る。快楽の侵攻を、止められない。

「んふう、はあっ、ひィ……まずい、のにつ、んぢゅずッ、にぢゃあ、くちゅくちゅ……ずつぢゅりゅりゅうう！」

もつと。飲み下すほどに新しい唾液と先走りの混合液を喉が欲してからからと渴く。一分一秒たりとも混合液なしでいられない。もつと濃い、精液とのカクテルを注がれればどうなるのか、想像するだけでジュンと股間が期待で濡れた。どくんッ——封印された下腹部で、甘い痺れが爆発するのを、もうずいぶん前から抑え込めないでいる。

老人以上に、真希の肉体には限界が差し迫っていた。

「つくはあ……！ さあ、後は……もう、じきに精を……光輝の靈氣と同じ效能の、精液を！ そなたの胃にじかに注ぎ込んで仕舞いとしようぞオ！」

しわがれた声に應じて、ゲンと一回り膨れた肉勃起が強かに巫女の喉を打つ。

「んぶうっ!? ごぶっ、げほおおッ……！」

突然の圧迫に驚いた喉奥が痙攣し、派手にえさぎ上げてしまう。勢い余って口元をあふれた唾液が、ぼたぼたとまるで涙のように顎を伝い落ちていった。

生物としての本能からではなく、密法僧の意思の力で勃起した肉の塊で喉をぶたれ、鬨られ、それでも爛れた心が喘ぎ、肉の悦びにうち震える。自製の利かぬ肉体に引きずられ、心もたちまちに肉欲の渦へと吞まれていった。

——ちゅごッ！ どづづん！ づごच्चゅごच्चゅぢゅぢゅぶぶぶッ！

「んぶうんッ、うえっ……はぐんッ！ ぐぶ、ぢゅりゅ、んは、ひッ……やああああ！」

膨れた瘤肉に小突かれる喉奥から、ジンジンと甘い衝撃が伝導し、心が溶かされていく。

舌先をあふれた先走りと唾液とが絡まり、極上の甘い蜜となって喉を潤わせてくれる。

指一本触れられぬまま硬く尖った乳首と張り詰めた乳肌が高揚の薄紅に染まり、股間では袴とショーツを染み出した愛液が、へたり込む脚の下に大きな水溜まりを作っていく。

ぶくりッ——一際大きく肉勃起が膨張したのを感じる。

「そりゃあぁッ！」

ごづうんんッ!! 痛烈にぶたれ、視界が揺れた。亀頭で押し潰された喉元で、白濁の第一撃が迸るのを、巫女は喜悦に震える心と、蕩けきった身体とで思い知らされる。

——びゅぐんんッ! びるっびるびるびるうッ! ぶびいッぽびゅびゅうううう! 「んぶうううッ——!? んぐッ、ぐぶ、ぶッ……んぐふうううんんッ!」

頭を振って逃げよう、などとは思ひもしなかった。ただ、無意識に牡の濃い子種を求めて、舌先を滑る粘液に舌鼓を打つ。一心に啜り飲む白濁液の粘っこさ、熱さに、早くも満杯になった胃袋がカッと火照る。

「まだじゃぞお、まだ……わしの持てる精気をすべて注ぎ込んでくれるわ、ぬうん!」

ごんッ! ごちゅごづごづんッ! 男の腰が激しくぶつかる。一向にやまぬ快楽刺激の連続に、真希の喉は麻痺し、ただ痺れるような肉の悦びだけが脳髓を灼いていく。

「んごおっ、も、もおお腹一杯、にイッ、んぢゅぽっ、ぢゅちゅりゅりゅるううう!」

びゆるんッ、びるびるうっ……。注がれる濁液を懸命に飲み下しながら、うな垂れた四

肢を痙攣させる。陵辱され、精を浴びた肉体からの悦楽。人としての尊厳も、巫女としての誇りも踏みにじられ、悲哀に暮れていた心すら被虐の悦びに溺れようとしていた。喉奥にドロドロと濃く粘り強い射精汁が注がれるたび、強制されてもいないのに、喉が鳴る。(ま、まだ、出てるうっ……んはう、お腹、あたしと沙津樹の赤ちゃんがいるお腹が、パンパンに、男の精で穢されてくのおおお！)

びゅぶうッ！　ぶびゅぶ！　びゅッびゅぶびィィィッ！

ピンと張った乳頭が、搾られてもいないのに甘いミルクを噴きこぼしてしまふ。痺れ、不自由なままの腰がカクカクと勝手に飛び跳ね、射乳の脈動に合わせ肉の悦楽を貪る。母乳をひり出し軽くなつていく乳鞠全体が、切なくも心地よい甘い痺れで満たされていく。同時に、喉を滑り落ちる牡汁の濃密さ、氣道に絡むねっとりとした粘つきに、心の底からの震えが奔り――。

「んぶッ……！　ひぐふっ……ヒッひゃふううっ、んんふううううう！」

——びくんっ！　びくびくッ……。甘美な快楽の波に溺れた意識が何度も寸断され、垂れた四肢は惨めに痙攣を繰り返し、張った乳先が切なげに跳ねる。また。三度目の射乳快楽に襲われて、囚われの巫女はあえなく果てた。

「はふう……っ、あつ、はああううう……げぼおおッ！」

精液臭いげつぶが漏れ、次いでようやく解放された唇が忙しなく酸素を吸い漁る。吸い



込みすぎたせいで今度は激しくえすぎながら咳き込むはめとなった。

「げほっ、げほほッ！ う、ぐぶッ……はあ、あはう、い、息が精液臭イイッ……」

己の吐息にまで浅ましく反応し、張った乳先がなお硬く尖り、ヌルつく股下では新たな蜜が漏れこぼれて床を濡らす。三度の絶頂でもまだ満たされぬ肉欲に振り回されるがまま、真希の心に焦燥が募る。もどかしく、腕が自由なら股間や胸先を掻きむしりたい衝動にすら駆られた。肉体に刻まれた淫欲の枷は、着実に戦巫女を呑み込んでいく。

「……なんと。まだ欲情に身を焦がしておるのかっ。ならば……」

トロリと蕩けた瞳に浅ましい色を見て取って、老僧がまず驚嘆の声を張り上げる。ニイ、とわずかに嗜虐の色が男の目にはじんだのを、真希は見逃さなかった。

張りつく舌を跳ね除けぶるりと震えた肉棒が、吐き出しきって収まったはずの脈動を再び開始する。

ぢよっ、ぢよろろおっ……。

「んぶッ!? ぐっ、ひやああ……!」

舌尖に感じた生ぬるさと、口端からこぼれる湯気まみれの黄色い液体。アンモニア特有のツンと鼻先を突く刺激臭に、今度は巫女の目が驚嘆で見開かれた。

(いやあああつ、オシッコ！ オシッコ、口の中でされてるうう……!)

そればかりはと首を振ろうとするが、老人とは思えぬ腕力で首を押さえ込まれ、髪をつ

かまれて、一滴残らず強引に口中へと注がれていく。直接ビシャビシャと喉を小便が叩く不快感に、眉根が自然とたわむ。妖怪どもにすら受けたことのない恥辱責めに、屈辱ばかりが胸を突いて湧き出してくる。

「これでっ……っほうう。そなたの邪気も浄化されるであろう。後は……そなたの妹、沙津樹にも同じ儀式を与えぬとな。その上で、腹の子を殺す」

(さつ、き……も？ 沙津樹も、あたしと同じ目に……そんな、こと……！)

そんなこと、させない——！ 妹の名を耳にした途端に、黒い感情が胸を突く。塩辛さに縮こまる舌先を無自覚に牡肉に絡め、逃がさぬように搾り立てる。

「ぬ、ぬうつ、何の真似じゃ」

怒りに乗じてドクドクと、腹になされた刻印から注がれる鬼の邪気が、胎児を通じて流入する。失った角が、頭部から生える感触。同時に口中で、鋭い牙が伸び揃う。

がりいッ——！

「ぐ、うあ……？」

一瞬、何が起こったのか分からぬという顔をした老人の股間で、赤い飛沫が噴き上がる。「渡さない。沙津樹は誰にも、渡さないッ！」

ぐッ……ずぶ、ぶぢんッ！ 深々と肉勃起に食い込んだ二本の牙が、半鬼化した顎の力によって無残にかじられ、ちぎれ飛んだ。ビチビチと、まだ白濁と小便、血の香りが充満

する口内で跳ねる肉棒の切れ端を、鬼巫女は唾でも吐くように吹き捨てた。

「こ、殺せ。この女をここで殺さねば、人々の明日が……つぐひあ！」

血を噴く股間を庇い、尻もちをついて逃げようとした老人の顔面が、巫女の拳骨一発で無残にひしゃげる。すでに脚の拘束を引きちぎり、腕の自由も取り戻し、胎の刻印から満ちてゆく邪気は本堂全体に充満しつつあった。

「死ぬのは貴様らだ……！」

ぶん——と真希の右手に、黄金の刃が出現する。妹から譲り受けた能力。常に傍にあつた温かさ、沙津樹の体温に包まれて真希は一直線に本尊へ——その膝元で今は眠るように沈黙する宝刀・光輝へと駆けた——。

結局、高野は一日で落ちた。それも、ほぼ真希一人の手によつて。数多あまたいた修行僧は一樣に殉教。生き残りを出せば結局は禍根を招くこととなる。文字通り鬼となつた真希は、

一人の僧も残さずに黄金の刃で斬り捨て、最後に火を放つて寺院を焼き払つたのだ。

（子供や女がいなかったことがせめてもの幸い。僧たちよ、恨むなら、あたしを恨め……死した後、罪はこの身で償う。今は……沙津樹を助けるまで、あたしは死ねないっ）

唯一生き残つていた土蜘蛛の背に乗り、急ぐ鬼巫女の右手には、巖重な封印が施された一本の刀。高野の宝刀・光輝が握り締められていた。

「はへああああッ！ あひつああひいああああッ！」

深々と突き入った亀頭——鋭くくびれた傘頭に、絡んでいた腔粘膜が激しく擦られた。扱かれ、引き剥がされ、それでもなおおすがるように蠕動する。

最初の一突きで意識が寸断され、短い間隔で何度も飛ばされた。バチバチと脳髓が焦げつき、思考が消失する。パクついた腔口が蜜を漏らしながら開閉し、突かれた子宮全体がジンジンと痺れる。最上の多幸感が張り詰めた胸一杯、潤んだ股根まで埋め尽くしていく。「そおらッ、食らえッ！ どうだア俺様の逸物がいいんだろう！ おらァァ！」

ぐぼぶッ！ ぐりゅぐりゅぐりゅッ！

子宮の奥を押し潰すように突き上がり、目一杯潜り込んでなおまだ余る極太の肉幹で、充血する秘豆までをねじ潰された。

「んおッ！ おひッ！ いぎあッ、んひおおお〜〜〜！」

びゆるぶつぶびゅぶ！ 抽送のたびに擦られる過敏な豆粒からの疼きと、突き刺さる喜悅のまま、はしたなく弾む乳先から母乳を噴く。

「うお、ニユルニユル滑る……くっ、デカ乳が吸いついてっ！」

真下から突き上げられ自然と前のめりになる真希の身を肉棒で押し返し、乳谷を責める男が母乳のヌメリと温もりに硬直した幹で擦り立て、我慢汁と乳液を掻き混ぜる。

谷間に溜まる母乳が牡の吐き出した我慢汁と絡まり、より密着した乳肌を、まるで肉棒

に吸いついたかのように感じられて、肉の隙間を埋められた充足感と、摩擦による熱とが豊乳全体を包んでいく。知らず知らずのうちに寄せた左右の乳頭が擦れ合い、ズキズキと心地よい痺れをもたらしてくれる。

「はあっ、あは、はあううッ……か、硬いのおビクビクしなつてえええっ」

抽送の際に飛び散った混濁液が唇を濡らす。甘くて苦い、喉に絡む味わいが堪らなく愛しい。我慢できずに頭を下げ、いつしか乳の谷間へと鼻先と唇を近づける。この、癖のある味が病みつきになり、狂わされている——自覚していても、衝動を抑えることは叶わなかった。

「んあ、ぢゅッ……あふう、ああはッ……我慢できない……つぢゆるるる！」

「うおッ！」

ついに乳谷から顔を出した肉突起に唇を押しつけ、直接汚濁を啜り込む。咥えた瞬間に亀頭が喜びにまみれて一回り膨れたのを舌先で感じる。荒い息遣いのせいで口端をこぼれた汚液が、ぼたぼたと朱の袴生地に汚点を刻んだ。口内に苦みが満ちると同時に広がる充足感に、心と肉粘膜が震えている。

火照る頬を緩ませ、垂れ下がる目尻には嬉し涙を浮かべ、だらしなく震える唇はぬめぬめとテカリ、よだれと汚濁のこぼれる赤い口内からチロチロと舌先が覗く。まさしく淫婦の表情を浮かべるかつての尊敬の対象に、村人たちから一斉に非難と侮蔑の声上がる。

「みっともないツラ晒しやがって……所詮色ボケの男狂い、いや妖怪ちんぼの虜かッ！」
男たちが罵声を浴びせながら、つかんだ己の肉勃起を右手で扱く。ぶんと漂う、それぞれにわずかずつ違う臭みが合わさり、巫女の鼻腔を麻痺させる。

「うわあ……ひどい顔。ふんっ、人を捨ててまで生き延びたあんたより、死んでいったあたしたちの娘の方が何十倍もましよッ！」

「あんな女と比べちゃ娘たちが可哀想よ。見てよ、あのだらしのないアクメ顔。みじめつたらしいったらありゃしない！」

私たちの容赦ない侮蔑と嘲笑が堕ちた巫女の心の生傷を抉り、掘り起こして、濡れた桜色の乳頭の奥から歪な快感を引きずり出す。口々に罵る女たち、特にまだ若い妻たちの一部が股間をもじつかせ肉悦を堪えている。

(髑られて、か、感じてしまおう……乳首だって、こ、こんなにイ！)

肉棒を刺激するために寄せた左右の乳先で、コリコリと張り詰めた突起が擦れ合っては、切ない痺れを乳風船の中へと充填していく。溜め込まれる欲望で膨れた風船は、白いミルクを噴き、甘い快楽を吐いて煩悶し続ける。

揺れる朱袴とその真下でぐちゅぐちゅと鳴る結合部に視線が集まり、なおさら肉の唇が馬勃起へと吸着するのを感じ。羞恥を抑え込む彼女たちの表情にさえ欲情してしまう鬼巫女の淫らで無節操な身体が、心底恨めしく、また心地よかった。

「ふんっ、また締まったぞ。口汚く蔑まれるのが好きか？ この、牝豚女がアッ！」
「ち、違つ、んんあぐああああアッッ〜!!」

——ずぶぢゆううう！ ぶぢゆんッ、づぼぶぢゆううう！

強かに打ちつけられた肉傘がビグビグと跳ね、噴き出す欲望汁をすり込みながら子宮頸管粘膜を削る。さえぎられた言葉は子宮内を巡る衝撃に吞まれて掻き消え、残った快樂だけが孕み穴を支配した。

(ひあッ、イつてる、あたし、イつてるうううんんううう！)

ぶり返した絶頂の余韻が腔襞の隙間を埋め尽くし、絶え間なく胎道を痙攣させる。牝の熱と子種を求めて牡幹にすがりついた髪と、コリコリとした子宮粘膜が「もつと穢して欲しい」と啼き喚いては引き締まり、こぼれた涙代わりの愛液が牡馬肉を磨く。

勃起に押されて寢床を奪われた胎児の呪力で鬼の身を灼かれる。その痛みにさえ快感を覚え、直後に噴き出す邪気で脳内は快樂一色に塗り潰されてしまう。繰り返し脳裏を縦断する白熱に浮かされ、ひつきりなしに喘ぐ口端でよだれが泡立ち、湯気をくゆらせて白衣に、汗ばみながら牡を締めつける乳谷にこぼれ落ちる。

「ぐ、おお、またぬめるっ……畜生オオッ！」

負けじと腰を振る男のこぼした泡立ち汁が間近で待ち構える唇を直撃。舌先をかすめた苦みが股間を突き抜けた。

「あはッ、ひいひいッ！ これ、この苦い味があつ、んぢゅつ、ぢゅぶぢゅうう！」
待ちきれずに舌で尿道口をほじくりながら吸いついた。頬をへこませはしたなく啜れば、あんぐりと開けた口腔にどぷりと我慢汁がなだれ込む。

「うひいつ、す、すげえ吸いつきつ……それに何てエロいツラあしてやがるッ！」

脚が悦びで震え、伝導した牡馬の腿も震え、そのまま切り返すように律動が巫女の股間を刺し貫く。濡れ唇の吸引から逃れるようにまた乳谷に沈んだ男の臭みと味に飢えて、粘液の糸を引く舌先がレロレロと宙を掻いた。肩先をずり落ちた白衣に、乳汁が飛ぶ。

（ふああつ、またあつ、またおっぱい出ちゃつてるううう！）

忙しく吐息をこぼした唇はぱくつくばかりで、爆ぜる感情を即座には紡いではくれない。乳も、手も、股も、口も。どこもかしこも牡汁を求めて咽び泣いていた。

牡馬の切っ先が胎児の腹を擦り、我が子が泣き喚くたびに光の呪力で身が焼かれるような痛み、いや悦樂が伝わる。疼く胎の刻印が、純然たる肉喜悅を伴って孕み穴全体を染め抜いていった。胎児の泣きじゃくる声が、遠ざかつてゆく――。

「ぐふうつ、わしもそろそろ……ッ！」

馬頭妖怪の律動であふれた快楽に呼応して握り込まれた左右の肉勃起も、しきりに半透明汁を漏らしながら、ビクンビクンと指の拘束を解くべく暴れ回っている。特に、遅漏とはいえ長時間扱かれ続けた老木はすでに臨界点を超えていた。扱かれすぎて赤く腫れたシ

ワまみれの幹を震わせ、欲望汁の溜め込まれた玉袋がきゅつと窄まり縮こまる。

「ぬうおおお！ でつ出るぞオオオオ！」

——ぶびゅぐッ！ びよぼるるるるうッ！

「んんあはああああ！ 熱いのっ、指に絡んで、ああ、く、臭あいイイ……んんうッッ！」
左手の中指を弾き飛ばし、しぶいた白濁が肘から袖口で縛る白衣まで飛び散った。じゅわりとまた染み込む牡汁が増したことに、極上の幸せが胸を突く。

乳房は発射をせがむように母乳まみれの谷間で勃起に吸いつき、すでに一発分の濁液が絡んだ右手はより食欲に、膨れた龟头を爪先で搔いた。そして目一杯埋め尽くされた膣肉はぎゅうぎゅうと馬勃起を搾り、下りてきた子宮内では粘膜全体が泣きじゃくる我が子をそっちのけで牡肉にすがり、蜜を塗り込める。

「とまらなひいいッ！ お乳も股の汁もお、止まらないのおほおおおおおお！」

開きっぱなしの乳腺からだだ漏れる母乳が挟んだ肉勃起の龟头で跳ね返り、ピチピチと乳肌全体を温もりで包み込む。楕円にひしゃげ中央に寄る二つの肉丘は母乳でテカテカ濡れ輝き、陽の光を浴びてより淫猥に周囲の村人たちの目をくらませた。

股根では馬肉棒で掻き出された蜜汁が、ふぬけた腰を突き抜ける切なさと共にぶぼぶぼとあふれ、また押し込まれる勃起に絡んで攪拌される。

「くひヒヒイインッ！ これだアこの締めつけッ、ぐオッ、ぐッ、オオオ！」

肉傘がこじ開けた子宮口を拡張しながらブグリと膨らむ。漏れ出る獣臭い我慢汁の発射間隔が狭まったことで、真希は牡馬の限界も間近であることを知った。

（だ、出されるう。牡馬の濃くて臭い、ネバネバ精子イ……！ 子供がもういるのに、お腹の中に直接ッ、ま、また妊娠させられちゃうふうううう！）

ぎゅちッ、ぎゅちッと潤んだ媚肉で牡馬肉棒を締めつける。心の拒絶が嘘であると、堕ちた肉体が告げていた。淫らにくねり進んで腰を落とす尻肉を、風に舞う袴の朱が飾る。よじれた下着脇からは物欲しげにヒクつく尻穴までが丸見えに、牡馬の目を愉しませた。

「ぬぐあ、ああひイッ！」

びよぶるっ！ びゅぶ……。手のひらに塗り込められた粘性汁が爪の中にまで垂れ込んで、穢す。もう、全身どこにも戦巫女であったころの高潔な部位は残されていない。深く、深く傷を負わされた心が、肉欲をあふれさせ甘く咽び泣く。

パンパンと尻がたわみ、弄られてさえいない尻穴から腸液がにじんで牡馬の黒々とした茂みを汚した。めくられた袴に馬の蹄が食い込み、ミチミチと半ばから引き裂かれる。垂れ落ちた袴は短くなり、醜く腫れ上がり、濡れ光る結合部が衆目に凝視される快感。

「はひっ、ひい！ 見られてるっ、みつともない、はしたないあたしのアソコおおッ！」
より前のめりに、乳谷で挟む肉棒を刺激する。もつとだ。もつとねっとりと熱い牡汁が欲しい——！

応じるように男の手が左右の乳肉を押し潰し、歪に捏ね繰り回して牡肉へと吸いつかせる手助けをしてくれた。二つの柔肉の谷間で、肉棒が忙しなく脈を打つ。上ずった声を張り上げた男の腰がひと際強く跳ねる。ぶくりと膨れた肉傘が花開くように震え――。

（くるッ！ んはあおおつ、早くつ、早くぶちまけてえええ！）

待ち構えるように突き出した舌先へと、白濁の飛沫が噴き上がる。

「の、飲みやがれえええッ！ くうッうぐおおおおッ！」

ぶびゅッ――びちやびちやびちやあああああッ！

胸間を噴き出た白濁の飛沫が巫女の鼻下を直撃する。垂れた苦みが、飲み下した喉から下降し一気に股間を強襲した。パチッと弾けた視界が霞む。うねる膣肉が馬勃起を押しさえ込み固定して、痙攣し続ける子宮頸管が龟头を啜え込んだ。

「ひぐうッ！ んくはっ……か、あは……ンンッッ！」

酸欠で息が詰まり、意識が朦朧と薄れる中。股間で膨らむ牡の存在と、泣きじゃくる我が子の胎動、そして迫り上がる肉欲の塊。三つの感覚だけが、くつきりと刻まれる。

ドスドスと無遠慮に突き上がる肉塊の、脈動一つ一つが膣壁を震わせ、白熱の快楽を女の中核へとすり込んでいった。突き入れられるたびに意識が飛び、抜かれる時に膣壁を扶かれるその悦びで目が覚める。

「おひッ！ ひぐふっ！ んふうあああああッ！」

もう、はつきりとした言葉を吐き出すのも困難だった。ただひたすら股間を奔る快樂信号を貪る。高みに上ったまま下りてこられなくなった快感の赴くまま不規則に、啞え込んだ逸物を厳しく締め上げる。

「ブルウツ！ ありがたく受け取れええツ！ ヒツ、ヒヒイイイイインンツツ!!」
ブグリと膨れた亀頭がどすと子宮口に叩き込まれ、捏ね練るように牡の腰がうねった。
「あひやおツおおおおおおおツ！ んおつ、おふあおおおおツツ！」

どぐんツ——瞬間的に爆発した邪気が子宮から漏れ出て、肉穴全体を一気に侵食した。みっちりと埋まる牡勃起の先端に、覆い被さるるように子宮粘膜が吸いついて——。

——どぶどぶどびゆぶぐうううううツ！ ぶびりゆツぶぼどびゆぐぐぐびイツツ!!
瞬く間にあふれ返る牡粘液を、子宮細胞が食欲に啜る。なみなみと満たされ震える揺りかご内で赤子が泣く。染み出る光の呪力を抑え込む大量の邪気が、肉穴を埋めて蕩かせる。
「ひぐうううううツ！ んほお……ツひやぐふうう！ お、オマ○コオオツ！ んぐうううツ、やツ、ああああぐひあああおおおツツ……!!」

身に余る媚悦に、だだ漏れる母乳と愛蜜が止まらない。漂う甘ったるい牝臭氣に引き寄せられたかのように、村中に轟いた牝の猥褻な絶叫とほぼ時を同じくして、周囲からも白濁の噴水が無数に飛び散った。

「食らえツ、娘の仇めええええ！」

びゅぐぶ！ ぼびゆりゆぶふうううッ！

「お、俺もっ……そのみつともない鬼のツラにひっかけてやるッ！」

びゅぼッ！ びゅちヤッぶびゅちやびゅちヤアッ！

無様に喘ぐアへ顔に、だらしなく揺れる巨乳に、そして剥き出しの黒き刻印——不義の子を宿した妊婦胎には特にたっぷりと。降り注ぐ粘濁液が張りつき、きめ細かな肌から染み入る。短く膝上までちぎられた袴は鮮やかな朱色を失い、白衣に黄ばんだシミが浮いた。「あひッ、ひぐ、まらっ、いぐううッ……んんぐふうううんッッ！」

ビクビクと、抜かしたはずの腰だけが勝手に、さらなる牡汁を求めて舞い踊る。すでに半ば意識を手放した真希には、浴びせられる白濁の中に放尿が混ぜられていることにすら気づけなかった。

——びゅびッ！ びりゆるるる！ ッぶしィッ！

注がれる端からすでに満杯の器を子種がこぼれ、結合部から染み出た白濁を追うように噴き出た蜜が押し流す。

「ひ、あ……ああは、ああ……ッ」

ヒクヒクと小刻みに震える股間で止め処なく蜜がしぶき、粘り気の強い牡汁で染め抜かれた乳先でも、さらに濃い乳白色の噴水が二つ、高々と噴く。すでにおぼろげに霞んだ視界は黒で覆われ、何物も映さない。



「またああっ、また赤ちゃん産まれるふうううっ！ んおっ！ おぐふうううッッ！」

——ぶりゅっ！ ぼとんっぼとぼとッ！

姉巫女が、また土蜘蛛の子を卑しくくねる産道から産み落とす。肉悦楽に溺れだらしく開いた唇と、そこからこぼれるよだれ。蕩けた眼差しに涙を浮かべ、姉がまつすぐにこちらを見ている——。

（ねえさまっ！ そ、そんなに気持ちいいのっ!? 赤ちゃん産むの、そんなにいつ！）

姉の痴態に見惚れ、いつしか自然と唇を結んで、下腹に力を込めていた。

「んひっ、いうんっ、んっんんん……んんおああああ！」

——ずるッッ！ ぶっ、ぶりゅんッ！

震えんばかりの肉悦楽が何度も脳裏で弾け散る。いきむ巫女の胎から不意に力みが抜け、ついに、その時は訪れた。子宮口をくぐり抜けた鬼子が、身体をねじり、肉粘膜を抉りながら這い出てくる。

「来たか、我が子よ！ オッ、ウオオオ——ッ！」

——どぢゅっ！ づぼぶ！ ぼぶっどぢゅどぢゅどぢゅどぢゅぶうッッ！

我が子の精気あふれる邪気を感じ、鬼の肉柱も最大限に勃起する、激しく脈打つたびに押し潰れる肉粘膜が、甘い痺れと息苦しさの狭間で咽び泣く。涙の代わりに漏れ出る蜜は、這い出る鬼子の手助けとなった。

「ふウウ……ゆくぞ！」

「いひやあああ！ 赤ちゃんのハイハイで感じながら、産むなんてええええッ！ やはあ
おおつあはおおううううううううううう！」

——ぢゅごぶツツツ！！

懇願する巫女妊婦の声も空しく、とどめの一撃が膣口を打ち抜いた。突き崩された肉唇の締めつけが緩み、多量の蜜と共に大きな異物が一気に肉粘膜を這い進む。

「んおおつ、いぎッ……またあつ、また出るう！ ひはあつ！ 蜘蛛の子供産んでへえ
つ！ イクツイクウウウウウウ！」

鬼に抱かれた妹の煩悶に、淫らな水溜まりでもがく姉の喘ぎが重なる。

黒く醜い刻印が浮く胎をうつ伏せに浸し、ばたつく脚がビクビクと跳ねていた。一足先に産みの悦びを知った姉巫女はよだれをこぼす舌を垂らし、取り憑かれたかのように繰り返し嬌声を漏らし続ける。

「ね、ねえさつ、んぎいッ！ んッ！ んうんッ！ んッふわああアアアアッ！」

——どぼびッ！ びぶりゅ！ ぽぼびゅぐぐ！ ぶぼ！ ぽびびびびィィィィィィッ！

姉の艶姿に見守られ、いきんだ胎内で子種が弾ける。跳ねる黒い切っ先から噴いた、爛れた白濁の熱に溶かされて、沙津樹の脳裏にもまた、出産の幸せが克明に刻まれた。

「あひあああッ熱いのおおお！ やああつ、いひやあッ！ うッ……産まれるうううう



ボタッ、ボタタッ、ごぼぶッ……。勃起肉棒だけでなく、だらしなく開いたままの秘部からも、注がれた精液が残照に照らされながら漏れこぼれていく。ゆっくり、ゆっくりと閉じゆく肉穴に染み入る快感の痺れと失くした胎の重みへの寂寥に、足袋に包まれた足先がきゅつと丸まりつんのめった。

(産ん、だああ……。鬼の赤ちゃん、でも私、まだ……。んああひいッ……)

震えつばなしの四肢で頼りなげに鬼の腕にしがみつき、肉悦樂が行き交う思考の片隅で、少女はまだ自分の命の火が尽きていないことを知る。たくましい腕の抱擁に、押しつけた胸先が熱く悶えてまた蜜を吐く。

「んんああ……。あふおおお……。で、るううッ……。んひやあああああ！」

「より邪に近づいたことで御子の出産に耐えられたのじゃよ、ひいっひひひ。言うなればわしらのおかげというわけじゃ」

相変わらず姉の尻をほじりながら嬉々と口を滑らせる老妖怪の声を聞き流しながら。

——びゆるっ、ぶびびびっ……。びゅぐんッ……。びゅっ、びゅびゅうっ……。!

濡れた股座で白濁と黄色の噴水をしぶき、さらに反り立ったままの擬似男根がもう一筋の飛沫を加える。——心地よかった。噴き漏れる濁液が近場の村人を汚し、そこかしこで嫌悪と憎悪が燃え盛る。そのことが堪らず、心地よく思えてしまう。ただ——。

「くひっ、あ……。ね、ねえさまああ……」

呪力を失い、疲弊、衰弱して人並み以下の力しか持たぬ腕を、どうにか足元の姉に差し伸ばそうとする。彼女の傍にいたい。そして他の誰よりも、姉に傍にいて欲しかった。

だが、今の沙津樹には手首に絡んだ荒縄を引きちぎることすらできはしない。

「聞け、人間ども。我が一族は再び世を握る。今日はその始まりの日となったのだ！」

鬼は右手に脱力する沙津樹を、左手に産まれたばかりの我が子を抱え、冷淡に地上の覇権を握ることを宣告した。慄き、惑い、そして絶望する村の者たちの悲嘆を、穢れた巫女はその素質ゆえに鮮明に感じ取る。

かつては清廉だった心が、軋み、罪悪に苛まれて怯えていた。だが、一方で子を産み落とした喜びが、胸を一杯に膨らませて乳を漏れ出させてもいる。

それでも、沙津樹は届くはずのない手を差し伸べようと、いつまでも肩を震わせ続ける。肉の快楽に吞まれながら、心は常に最も愛する者を求めて疼きを発する――。

「さ、つきつ……」

土蜘蛛の子を産みながら、姉巫女が震える声音で名を呼んだ。姉妹の視線が刹那きわの際に絡み、溶け合っていく――。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>